

吉野ヶ里遺跡全面保存を実現させた

江永次男先生を偲んで



国営吉野ヶ里歴史公園（長崎本線線路そばより）

洋画家 下村康二

吉野ヶ里を語る集い

2014年（平成26年）2月23日

石戸敏治

姫方、丸山、吉野ヶ里 ― 江永先生を偲んで

前間良爾

佐賀県、あるいは日本の文化財保存運動にとって、江永先生の名前を逸することはできない。姫方遺跡保存運動に始まる佐賀の文化財保存運動は、文全協等全国の運動と連携しながら、丸山遺跡移築保存運動へと連なり、全国を沸かせた吉野ヶ里遺跡保存運動で頂点を迎えるが、その中心に江永先生の名前がくつきりと浮かび上がる。

私の思い出も姫方に始まる。一九七二年二月に、自然保護、文化財保護の市民団体として「佐賀の自然と文化をまもる会」が発足したが、その最初の運動として、玄海原発反対運動とともに、姫方遺跡保存運動が始まった。五百の甕棺墓等、古代のお墓の博物館とも称された中原町の壮大な姫方遺跡が、ほとんど発掘調査もされないままに破壊が始まり、これに抗した佐賀大学考古学研究会の学生有志による、ブルドーザーをかくぐつての果敢な発掘が、マスコミの目に留まり、間もなく一般市民、労働者、教師、議員等、広範な保存運動が展開した。佐大学生、中島直幸君、中原町のサラリーマン山崎義次さん、さらに当時中原中学の英語教師であった江永先生がその中心であり、この三人が以後の佐賀県文化財保存運動の伝説的人物に成長していくのである。中原町、山崎宅での深夜に及ぶ熱っぽい議論は、今でも私の脳裏から消えることはなく、まさに佐賀県文化財保存運動の原点であった。

丸山遺跡保存運動も懐かしい思い出である。横断高速道路建設に伴う発掘調査で、支石墓四〇基、石棺三基、古墳一三基を含む壮大な丸山遺跡が発見され、その全面保存が問題となった。当時、江永先生の姫方遺跡保存協議会は佐賀県文化財保存協議会へ発展しており、保存運動の成果として、県庁の社会教育課から文化課が独立し、著名な考古学者、高島忠平氏が着任していた。市民運動と文化課の交渉は、きわめて良心的に進められるようになっていた。一九七四年五月の市民運動主催の遺跡見学会は、献身的なビラまきが功を奏したのか、予想を超えて二百名以上の一般市民が参加し、進んで講師役となられた高島氏の説明に熱心に聞き入った。唐津からはるばる参加された、中里紀元氏は、「小学生から七〇歳近い老人、主婦、労働者、学生、教師など、あらゆる階層の人々が参加して」高島氏の説明に熱心に聞き入る姿に、「佐賀の考古学、その行政関係にも新しい光」を見出している。江永先生の満足した笑顔が忘れられない。丸山遺跡は、結局、移築保存という独特の保存方法がとられ、全面保存には失敗したが、姫方の部分保存からの大きな前進があった。

吉野ヶ里遺跡の保存運動に果たした江永先生の功績は、今更語るまでもあるまい。私としては、一九八二年の夏、江永、山崎、前間の三人で吉野ヶ里丘陵を散策し、縄文、弥生、古代から中世に及ぶその壮大きわまりない遺跡の全貌を垣間見て、佐賀県文化課に、市民団体として最初の要望文を渡したことが忘れられない。江永先生の地道な調査と鋭い感覚の結果であった。要望文には、「この丘陵がもし、県の史跡公園、文化公園、県民の森として保存されるならば、県民のみならず全国民の文化・教育に貢献すること、実に大なるものがある。県の英断を望むものである」と書かれている。それから、十年の歳月を経て、吉野ヶ里は国営歴史公園として全国の耳目を集め、多くの見学者を引き付けている。この十年間にわたる江永先生の筆舌に尽くしがたい、縁の下の影の努力は、国や県の行政、国会議員や著名な考古学者の功績をはるかにしのぐものである。佐賀の自然と文化をまもる会」会報、二百号に掲載された、「吉野ヶ里を全面保存せよ」の横断幕を掲げる江永先生の雄姿は、絶頂期の先生の姿である。

まさに、江永先生の半生は、姫方の部分保存から、丸山の移築保存、吉野ヶ里の全面保存へと、佐賀県、さらには全国の文化財保存運動の金字塔といえよう。

(佐賀大学名誉教授 元佐賀の自然と文化をまもる会長)

江永次男先生 ありがとうございますございました

鬼塚克忠

江永次男先生は言うまでもなく吉野ヶ里遺跡保存の最大の貢献者です。同時に私のライフワークである「吉野ヶ里墳丘墓構築技術のルーツを探る研究」の着手のきっかけを作って頂いた恩人でもあります。

江永先生には「佐賀の自然と文化をまもる会」でお会いしました。月例会では、先生はいつも手書きの資料や大きな紙に書き込んだ遺跡分布図を使って、吉野ヶ里遺跡をはじめとする県内の遺跡の価値や重要性を熱心に話されました。一九八〇（昭和五五）年頃から十年ぐらいの期間、場所は佐賀郵便局の東側の古い木造建物（青年会館）や、お濠の近くのコンクリートの建物（PTA会館）や西高校の西側の教会（霊水教会）などでした。先生はその頃、鳥栖からバイクで通ってこられ、夜遅く帰って行かれました。あちこちの遺跡の見学に連れて行って頂きました。

私は佐賀大学に赴任（一九七〇（昭和四五）年）間もなく、前間良爾先生に誘われて佐賀の自然と文化をまもる会に入りました。当時、環境破壊（公害）に関心はあるものの、遺跡や埋蔵文化は全くの門外漢でした。江永先生からいかに大事な遺跡であるかと熱意あふれる説明をたびたび受けても、今ひとつピンと来ませんでした。しかし、先生の遺跡や埋蔵文化財への愛情と保存への情熱は私にも伝わってきました。調査中の吉野ヶ里遺跡をみんな訪ねた際に、先生が「ここにはすごい遺跡が眠っています」とお話しされたことをよく覚えております。

記憶を確かかなものとするため、佐賀の自然と文化をまもる会会報の合本二冊、一〇〇〇号（一九七二年二月）〜一九八〇年十月）、一〇〇一〜二〇〇〇号（一九八〇年二月〜一九八九年四月）をひもといてみました。江永先生が会報にはじめて登場するのは三二号（一九七四（昭和四九）年九月）の主張「佐賀県の文化財保存の实情と問題点」です。吉野ヶ里遺跡保存が初めて表明されたのは、江永先生の「神埼工業団地造成計画に反対する」、会報一二四号（一九八二（昭和五七）年十二月）です。六ページの大作です。これによると、五七年七月二七日付け佐賀新聞の「神埼工業団地予定地文化財調査始まる」の記事を読んで驚き、八月一二日、前間会長ら三名県庁を訪ねるとあります。

これから江永先生の獅子奮迅の保存運動が始まります。まもる会例会の講演、現地見学会の案内、県内外の各種団体との交流、県や国への要望等々驚くばかりのご活躍です。

会報合本の二〇〇号（一九八九年四月）の一面に、「吉野ヶ里遺跡を全面保存せよ！佐賀の自然と文化をまもる会」の横断幕を持つ三人の写真があります。真ん中が江永次男先生、左端が山田哲秀会長、右端が女性です。合本編纂の山田会長のあとがきを読むと、一九八九年一月二五日神埼工業団地の起工式の日全面保存をアピールするための行動であるとあります。

江永先生を先頭に、佐賀の自然と文化をまもる会や諸団体そして多くの国民による保存運動により、一九九二（平成四年）年一〇月「吉野ヶ里国営歴史公園」の閣議決定へと前進していきます。私は一九九三（平成五）年二月、既に考古学調査が終わった墳丘墓の地盤調査をさせてもらいました。日本最古の盛土構造物である墳丘墓の土木工学、地盤工学からの調査です。その後、墳丘墓構築技術のルーツを古代中国に求め、墳墓や城牆の調査を行いました。江永先生にお会いしなければ、弥生時代の墳丘墓の調査は思い至らなかつたに違いありません。

江永先生には、最後にいつお会いしたか思い出さないうほど、長くご無沙汰してしまいました。吉野ヶ里遺跡の歴史国営公園としての保存の現状について、どのようなご意見を持っておられるのかお尋ねしたかったと思います。先生には吉野ヶ里遺跡をはじめとする多くの遺跡の保存への取り組みと様々なご教示に対し、遅くなつてしまいました。深く感謝申し上げます。

（佐賀大学名誉教授 元佐賀の自然と文化をまもる会事務局長）

「佐賀の自然と文化をまもる会」と江永次男さんと私

葛川正義

江永さんのあの笑顔に最後にお目にかかったのは、もう四年ほど前ではなかったか？鳥栖市教育委員会編『鳥栖市誌』の本編全五巻が出揃った二〇一〇（平成二二）年の夏頃だったと思う。江永さんは原始・古代編に、私は近・現代編にかかわって分担執筆した。同じ市史編纂にかかわっていても、時代がまったく異なるので、仕事のために落ち合ったのではなく偶然の再会で懐かしかった。しかし、ひどく痩せられたのでびっくりした。大病だったとお聞きした。

それはともかく、江永さんの原始・古代史への強いかかわりと、私の近・現代産業問題への関心が「佐賀の自然と文化をまもる会」（以下「まもる会」）を通じて出会い、毎月お会いするのが当たり前のようなお付き合いを頂いた時期もあった。

さかのぼるが、私は一九七七年三月に佐賀大学経済学部にて産業構造論担当者として着任した。しかし、「まもる会」とはその前から関わりがあり、一九七六年三月には「佐賀東部中核工業団地の見学・学習会」の報告者として招かれたこともあった。（「まもる会」の『会報』第四八号昭和五一年四月）。この報告骨子は、佐賀東部地域は北部九州都市圏とのつながりや全九州交通網の中核・鳥栖市に近いことから産業立地は容易に進むこと、産業立地が進んでも地域の雇用・所得の発展とはつながらず、自然環境の激変を見ること、したがって、地域住民自ら考える「開発」を進めるべきことを訴えた。佐賀東部中核工業団地は早々と造成されたが、その後に待っていたのが「神埼工業団地」、つまり今日の「国営吉野ヶ里歴史公園」問題であった。

一九六〇年代から八〇年代初期までは、「地域開発」という言葉が盛んにつかわれ、地域開発といえは「工場誘致」が常識のような時代だった。私も神埼工業団地の工業立地は即座に進むと見通していたから、土地利用として粗放化されたこの場所は、埋蔵文化財保存との調整がなくなるなら「工業団地あり」の立場だった。この工業団地計画では、埋蔵文化財保存用の緑地を三割以上確保するなどから、ほかと比べて良い方だという程度の考えでもあった。

江永次男さんは、私の考え方を真つ向から否定し、強烈なお叱りをいただいた。いわく「ここは国宝級の埋蔵文化財の中核地だ。粗放的土地利用というが、この先祖代々の土地に埋め込まれた伝統・文化をしっかりと見ないで、現状の土地利用だけから判断するな！工業団地ならほかにも遊休地はある」というものだった。やはり私は「安直なデヴェロッパ」になり下がっていたことを思い知った。工業団地開発を前提とした埋蔵文化財の「事前調査」から見えてきた吉野ヶ里地区のすごさにまったく脱帽した。先の佐賀東部工業団地にかかわって「地域住民自ら考える開発」と述べた私の言葉は、現実に即して、江永さんからしっかりと教えられたと実感した。

その後、江永さん達の「吉野ヶ里全面保存会」とともに活動できたことは、忘れられない経験となった。

江永次男さん 有難うございました。

（元佐賀の自然と文化をまもる会事務局長）

江永先生の思い出な運動家だった

河西 龍太郎

私が「佐賀の自然と文化を守る会」の会長をしていた頃、江永先生が県庁に吉野ヶ里保存運動の要請をしたということでご持参なさいました。私は当時、林道問題や水質問題や自然保護運動を主としており、文化運動には参加していなかったもので、吉野ヶ里のことは江永先生の声明文で初めて知りました。江永先生は多少興奮気味に「声明文は一晩で書き上げた」とおっしゃっていましたが、私のような素人が初めて読んでも吉野ヶ里保存の意義が良く分かる説得のある名文だと感じました。

以後、江永先生を中心にして、メンバーが毎日のように私の事務所集まり、佐賀市の中心街に出かけ、ビラまきや署名活動を続けられていたことを良く覚えております。

何度も何度も対県交渉も致しました。そのような運動を繰り返すうちに、圧倒的な世論が盛り上がりつつありました。新聞やテレビも取り上げるようになりました。私はこれまでに幾つもの運動に参加しましたが、運動というものは信念を持った人が中心になって、粘り強く、徹底的にやらない限り成功しないものだと思信していますが、まさに江永先生達はこのような運動を地道にやり切って、不可能と思われるような成果をあげたものと思います。

そういう意味では吉野ヶ里が保存されているのは江永先生等の尖鋭部隊の先見性と熱意の賜物と考えるのですが、ある時、私は県から吉野ヶ里の保存の祝賀パーティーに呼ばれました。おそらく江永先生の作られた「県に対する要望書」が吉野ヶ里保存運動の端緒として認められ、その文書が当時自然と文化を守る会の会長だった私の名前で出されていたからでしょう。私はパーティー当日喜んで参加しました。当然江永先生を初めとする吉野ヶ里保存運動を推進した人達がパーティーの中心になっているものと考えていましたから。

しかし、本当に吉野ヶ里保存運動のパイオニアと呼んで良いような人はほとんどそのパーティーには呼ばれていませんでした。それどころか、当時、吉野ヶ里保存の枠組みを狭くしよう狭くしようとしていた県の職員が功労者として呼ばれていたのです。

その意味では今回の江永先生の和島誠一賞の受賞を心からお祝い申し上げますとともに、その受賞の時期があまりにも遅すぎたことを残念に感じるものです。

江永先生を中心に行われた保存運動に対し心からの敬意を払いますとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(弁護士 元佐賀の自然と文化をまもる会長)

先生の冥福をお祈りします。

佐賀県立吉野ヶ里保存運動推進委員会(一九七二年)に開発業者が三養基郡中郷町(現みやき町)の東方

に建設しようとした吉野ヶ里を宅地造成工事を実施したら吉野ヶ里の遺構が約五百基出土当時では日本最

大規模であったが破壊された。これがマスコミ報道され県文化財行政の責任が問われた。江永先

生は保存運動を推進されたが一部が県史科指定に保存されました。

(吉野ヶ里遺跡を全面保存会事務局長)

江永次男先生は偉大な運動家だった

山崎義次

平成二十五年十月二十日、佐賀市のあけぼの旅館で「江永次男先生受賞の集い」があった。江永先生は本年六月、文化財保存全国協議会より、長年にわたって遺跡保存運動を続け、姫方遺跡をはじめ吉野ヶ里遺跡の保存に多大な貢献があったと認められ、「和島誠一賞」を受賞された。受賞の集いは十数人と小じんまりしたもので私も出席していた。江永先生本人も出席予定だったのが急に体調が良くないとの連絡があり、本人抜きで集いだった。ところが後から聞いた話であるが、実はこの集いの前日、つまり十月十九日に逝去されていたとのことだった。私はこの報に接し、愕然となりしばし言葉を失った。同時に江永先生と数十年にわたって共に運動してきた様々な思い出が走馬灯のように脳裏を駆け巡った。

江永先生との出会いは、昭和四十七年の五月で姫方遺跡の保存運動の時だった。だからかれこれ四十数年前のことである。当時は一般市民が保存運動に全く立ち上がらない状況の中で、私は江永先生に出会い、意気投合して共に運動したものである。メンバーが少し増えたものの非常に厳しい状況だった。運動する者に対しては行政側はあらゆる妨害と圧力をかけてきた。特に江永先生は中学校の教師だったので、中原町議会の保守議員より、あの偏向教師の保存運動をやめさせよと非難されたり、その意向を受けた校長が止めさせようとした。しかし、先生はこうした圧力などには絶対屈せず、敢然としてやり通した。

姫方遺跡は全面保全は出来なかったが、三ヶ所が県史跡として保存されるようになった。この姫方の保存運動は全国にも大きく報道され、県の遺跡行政のいいかげんさ、発掘人員や予算不足などの様々な問題点が露呈し、姫方問題を通して遺跡行政を大きく変えさせるきっかけとなったのであった（むろんその後も様々な問題があるが）。この姫方の運動は超保守的な佐賀県ではじめて起った保存運動だった。この後、「姫方を忘れるな」を合言葉に江永先生を中心として次の吉野ヶ里遺跡の保存運動に取り組んだのである。紙面の都合で詳細は省くが、平成元年二月下旬のマスコミ大報道の直前、江永先生は七田忠昭氏に秘かに面会し、彼を励ましマスコミ報道の戦術を彼に授け、結果あのような大報道につながったのであった。この話は長いこと二人の秘密であったが、江永先生が大病に罹った時、見舞いに行った際（H14・1・17）病室でこのことを明かされた。江永先生は大変誠実で謙虚な人で吉野ヶ里が守られたのは多くの人々が運動したおかげだ、といつも言われていたが、やはり江永先生の功績は大きい。姫方遺跡の運動が吉野ヶ里の丘に農業高校を移転させる計画をも断念させており、この意味で江永先生は「吉野ヶ里を二度守った」と言うことである。江永次男先生の功績は遺跡保存運動史上永遠に燦然と光り輝くにちがいない。先生のご冥福をお祈りします。

注 姫方遺跡は昭和四十七年（一九七二年）に開発業者が三養基郡中原町（現みやき町）の姫方丘陵（約一万二千坪）を宅地造成工事を施工したら弥生期の甕棺が約五百基出土当時では日本最大規模であったが破壊された。これがマスコミ報道され県文化財行政の責任が問われた。江永先生は保存運動を推進されたが一部分が県史跡指定に保存されました。

（吉野ヶ里遺跡全面保存会事務局長）

勤勉と情熱の人 江永次男さん

関家敏正

江永次男さんをはじめて知ったのは姫方遺跡（現みやき町中原）の保存運動を通じてでした。当時私はしんぶん「赤旗」の九州記者団の一員でした。江永さんが写したカメ棺や墳墓の写真帳を見て「これはすごい」とさっそく現地に行きました。当時の江永さんは中原中学校の英語教師でした。分野違いの考古学や遺跡の保存運動ですが、実に精力的に勉強されておられました。この保存運動の中で「佐賀の自然と文化をまもる会」に加盟されたのでしょうか。

「佐賀の自然と文化をまもる会」は玄海原発の立地に反対する運動を手始めに、ゴルフ場開発に伴う埋葬文化財破壊などを問題として各地で住民運動を組織していました。大型開発である東部中核工業団地（二塚山遺跡）や神埼工業団地（吉野ヶ里遺跡）がもちあがると、すぐに現地を視察し、埋蔵文化財の有無などを調べて対策を練るという地道な活動ではいつもその中に江永さんがいました。

とくに吉野ヶ里遺跡の場合は、早くから大きな遺跡が埋もれていることが知られていましたから、江永さんは発掘調査の現場にバイクで駆けつけては、情報をすばやく得ていました。そうした調査活動の結論として起案されたのが、「まもる会」の河西龍太郎会長名の「吉野ヶ里遺跡の全面保存を求める陳情書」（一九八九年一月二十三日提出）でした。この陳情書が文化庁を取材していた朝日新聞の記者の目にとまり、同年二月二十三日の全国的なスクープ記事となったのはよく知られています。

二十五年前。あの年の二月二十三日は「まもる会」が井本勇副知事と会って、先の陳情書に対する回答を受ける日に当たっていました。集まった「まもる会」のメンバーも、知事部局・教委側のメンバーもニュース報道に興奮気味でした。開発派の巨頭であった井本副知事がこう口を開きました。「今朝の報道で、私は開発部局、教育委員会、土地公社に対し『これまでのいきがかりを捨てて、どうすべきかを考えよ』と指示しました」と。あの日歴史は動いたのです。

その後も上峰町の八頭（やとう）遺跡の巨木の保存問題や吉野ヶ里ニューテクノパーク建設反対運動など江永さんは精力的に奮闘されました。佐賀の社会保険センターで「面白古代史」の講座を担当されたのは、私の妻小夜子が太極拳講師を勤めていた縁で紹介したものでした。センター側も「いい先生を紹介していただいて」と喜んでいたそうです。やや遅かったものの、文全協の賞を受けたという快挙もありました。

なおあの歴史的な「吉野ヶ里遺跡全面保存を求める陳情書」は私が編集・発行した「戦後五十年証言・直言集いま言わなければ」に全文収録しています。

（文化財保存佐賀県協議会 事務局長）

遺跡行政を変えた方 江永次男先生を偲びて

太田 記代子

吉野ヶ里遺跡全面保存会会長の江永次男先生が亡くなられて本当に悲しい事です。

江永先生は、吉野ヶ里遺跡の保存運動の中心的な方であるばかりではなく、日本の遺跡行政を変えた偉大な方と申せましょう。それまでの遺跡は、記録保存の表現で、遺跡そのものは破壊されて了うという惜しい歴史が続いていました。平成元年二月二十三日、朝日新聞一面トップの写真入りの吉野ヶ里の大きな記事、急いでつけたNHKテレビの吉野ヶ里報道がブームの幕開け、古代史ブームの始まりでした。この火付け役をなさったのが江永次男先生であった事を後に知りました。

佐賀が吉事で、こんなに注目された事は始めてとさえ思えました。私は、この日から喜びと悲しみの錯綜の中で保存運動を始めたのですが、江永先生は、それより七年早く昭和五十七年、県が吉野ヶ里に工業団地造成計画を発表した時から反対して保存を主張しておられるので今年で三十年余です。

私の喜びは、神埼高校の恩師、故七田忠志先生が昭和九年に考古学会誌に、吉野ヶ里遺跡群を重要な遺跡と発表されていた事が、全国に認められた事、悲しみは、こんなに大昔から大切にされ自然美と歴史のロマンに満ちた吉野ヶ里を工業団地で議決して了ってブルトーザー工事が目前に迫っている事、その上、私は県の管理職の一保健所長、県に逆らって保存を訴えるのですから辞表を出すようにと言われた事も幾度か。それ故に、江永先生のご苦勞がよく分かるような気がいたします。江永先生は公立学校の英語の先生、始めは只一人で「吉野ヶ里は遺跡だから工業団地で壊してはならない。工業団地は他の所に移して…」と主張なさる勇氣、「千万人とも言えども我行かむ」の心意気、本当に仰ぎ見るような志の高さです。エピソードが数多く残っています。

先生のご苦勞は、私達の想像より遙かに大きかったと推察いたします。語らずに逝かれましたので、ご夫人が想い出の記を書かれるよう希っております。今、思い出しても江永先生の保存運動の熱心さと卓越した方策、周到さ、緻密さ、立派さに亢奮を禁じ得ません。江永次男が徹夜で書かれた「陳情書」が文化庁長官を動かし、考古学者 佐原真先生のお心を揺らし、その波動が朝日新聞論説委員 藪下彰治朗氏に届き、平成元年二月二十三日に多くの人の心を揺らしました。もともとがこの地は遺跡で二千年以上、粗末にしては罰があたると戒めがあつて守られた聖域なのです。旧石器、縄文、弥生、奈良、平安時代から明治維新時の古戦場まで残る国の成り立ちが分る複合遺跡として考古学者は世界遺産の価値があると評しておられる吉野ヶ里、徐福、鑑真、王仁等、ゆかりの遺跡、将来も国際親善に貢献することでしょう。今、また遺跡群の中心的な場所で、弥生時代の水田跡と竪穴住居跡の上に無粋なメガソーラーが据えられた。遺跡保存と景観を守る運動の途中ですので心を残して逝かれたと思います。

「首なし人骨は戦士のもの、二千年以上の戦さ、もう止めよと平和を世に訴える遺跡」と話された佐原真先生や七田忠志先生と極楽浄土から吉野ヶ里をお守りくださるよう念じ感謝を込めてペンを擱きます。

(元佐賀保健所長 元佐賀県議会議員)

平成の幕開け前後に起こった大騒動を忘れたかのように、落ち着いた雰囲気にも包まれた吉野ヶ里遺跡には、今、年間六十万人以上の人々が訪れ、「吉野ヶ里ってすごいね!」、「二〇〇〇年も前にこんなにはばらしい建物があったかなあ?」などと、弥生時代や自分たちの遠い祖先についての話題で盛り上がっている。

平成元年(一九八九)二月二十三日、その内容が朝日新聞の一面とNHKテレビの朝七時のニュースで大々的に報道され、吉野ヶ里遺跡は一躍全国版の弥生遺跡として登場した。パノラマのように広がりをもって現れた弥生の大集落跡は、倭女王卑弥呼が都をおいた邪馬台国との関わりが深いということもあり、訪れた多くの人々に感動を与え想像力をかき立てた。直後の墳丘墓の発掘報道も加わり、現地は「吉野ヶ里フィーバー」の状態になった。結局、報道から二週間も経たない三月七日、当時の香月熊雄知事は遺跡の重要部分を保存することを決断した。そして、平成二十五年三月には国営公園部分の整備がほぼ完了した。まさに九回裏ツアーアウトからの逆転とも評される吉野ヶ里遺跡の奇跡であったが、その発端は江永先生の行動であったと思う。

江永先生との出会いは、私が大学二年生の頃か、先生の保存運動の契機となった当時の中原町姫方遺跡の保存問題の頃からで、四十年以上に及んだ。その後、文化財行政の担当者となった私に気を使っていたのだらう、県内遺跡の保存問題ではなく考古学の話に終始していた。そんな先生が、昭和六十三年の暮れのころだったろうか、吉野ヶ里遺跡について詳しい情報が欲しいと自宅を訪ねてこられた。「郷土史家としての先生」にそれまでの成果についてお話ししたことを覚えている。このことが、文化庁への保存嘆願書へとつながったことは後で耳にした。

この嘆願書を見た朝日新聞論説委員の薮下彰治郎氏を動かし、邪馬台国と関係が深い重要遺跡に、まさに造成工事開始が迫ったとの危機感を、歴史好きの国民に訴えるというマスコミの特性をうまく利用した大報道へとつながっていった。その仕掛け人は、もう一人の功労者である当時の奈良国立文化財研究所の佐原眞先生であった。つまり、これらの大きなきっかけをつくったのが、江永先生であったのである。

保存を訴えるだけではなく郷土史家としての資質を持たれていた先生は、行政の人間にとっっては手ごわかったが、温かいお心の持ち主ということもよく存じ上げていた。真に郷土を愛する心が、先生をして様々な行動へと動かしたのだらう。吉野ヶ里を語るとき、佐賀の歴史や自然を語るとき、人間江永次男は永久に欠かせない人物である。

(佐賀県立佐賀城本丸歴史館長)

県内遺跡保存運動の第一人者であった江永次男先生との最初の出会いは佐賀の自然と文化をまもる会（会長 久保浩洋佐賀大学名誉教授）主催の公開講座「吉野ヶ里遺跡について」を受講した時だったと記憶している。先生独特（風格）の手作り資料の中で遺跡の構造が立体と断面にて興味をおおるような図解で素人でもわかりやすく理解と関心がもりあがってきて五回程度継続して受講しました結果県当局は、工場団地造成を主張しているが、皆様と団結してこの重要遺跡は保存しなければならぬ考えになってきました。

私は中学校社会科教師だったので受講してよかったと思いましたが、その後保存対策会議等でも使用された資料はダンボール箱数個もあり永久保存と思つて大切にしています。

吉野ヶ里に見学にくる小中高生のガイド役を数年体験しました時も見学資料として利用させていただきました。

江永先生は中学校で英語と技術家庭の教師で歴史学と考古学は独学であつたようです。家族の話によると遺跡が破壊されると夜中に残念だといつて声高に泣いておられたそうです。

時はいくらか前後しますが、佐賀市小中教員集会の席上で県内遺跡の危機といつて何回か遺跡資料を配布して遺跡の歴史学術的価値等について解説されましたが、出席者が歴史学と考古学（古代史）について勉強不足のために全く頭がないので会場では「江永先生はおかしくなつておられる」という話声が聞かれることがしばしばあつたようです。時たまには「江永先生の解説はレベルが高くてむずかしくてわからん」といったヤジが飛んでいました。

考古学者高島忠平先生が奈良文化財研究所から県庁に赴任された頃からは、遺跡発掘現場のテントの中で論戦模様の場面を数多く見かけるようになってきました。

私が佐賀市と県の社会科学研究会事務局長を担当していた頃に、数回講師として九大教授鏡山猛先生（考古学）や佐大講師・中原町長で考古学の松尾禎作先生と講座を担当していただきました。特に江永先生は時間を延長して熱のこもつた講座ぶりでしたが、受講後のアンケートによると三先生とも内容が充実して授業に役立つといつて好評でした。生涯心に残る恩師となつています。

県議会でも工場団地造成案が自民党多数賛成によつて可決されてからは、連日連夜のように対策会議と行動で知事・議長・教育長・議員・文化財課・マスコミ記者団との会見、地元町長・議長・教育長・議員・有識者などに支援活動や交渉の先頭に立つて奮闘されました。夜間十時頃までの対策会議で先生はバイクで悪天候の日々もめげず鳥栖と佐賀を往復されて指揮をとられました。関係先に提出する陳情書や要望書と関係資料は他人や業者には依頼しない主義で自作自演不言実行型をモットーにした努力家ですばらしい人格者でした。

県議会でも知事が重大提案をするとのマスコミ情報はいつた。工場団地造成を白紙に戻して遺跡保存に転換するとの発言は信じられませんでした。

先般佐賀城本丸歴史館にて国立九州博物館長三輪嘉六先生（考古学）が「文化財保護の重要性」について心に強く深く残る講演の中で、文化庁に在職中に姫方遺跡（中原町）の保存要望書と関係資料が文化庁に掲出され初めて佐賀に出張して江永次男先生から現地で詳細に説明報告がありました。全国では数多くの開発か保存かで遺跡が揺れている中で家族包みで遺跡保存運動に頑張られた方は江永先生家族のみで全国でも珍しいと紹介されました。

江永先生ご指導有難うご座居ました。ご冥福を祈ります。先生のご功績を尊重して世界遺産実現まで頑張ることを約束いたします。